

目次

凡例……………二

うたたね……………五

弁内侍日記……………三

中務内侍日記……………三

とほすがたり……………四

竹むきが記……………九

京都付近地図……………二三

平安京の条坊と本書関係内裏その他……………二三

清涼殿図……………二四

関係系図……………二五

うたたね

『十六夜日記』の作者として有名な阿仏が安嘉門院に女房として仕えていた若き日、恐らく十七・八歳の頃の、失恋の記である。約一年間にわたる男との交渉を回想して涙にくれるところから始まり、恋に破れた痛手に耐えかねた彼女は、一夜安嘉門院の御所を出走し、西山の尼寺に入って一旦は出家を志すものの、結局は仏に仕えきれず、もとの住みかに戻る。たまたま任地遠江から上京した養父のすすめで、その任国へ伴われて行くが、間もなく田舎の単調な生活に飽きて都が恋しくなり、乳母病気の報を機に帰京して、再び旧居に落ち着くに至るといふ、多感な作者の心の動きを、みずみずしくも情熱的な筆で記した青春文学である。成立は末尾の記事である帰京の直後ではないにしても、程経てからではなく、失恋後一兩年位、仁治元年（一二四〇、阿仏推定十九歳位）前後と推測される。今回は、冒頭から父に随って遠江下向を思い立つまでを、一続きに採った。頭注にも指摘したように、『源氏物語』以下の古典の影響も強い。

伝本としては、東山御文庫本・尊経閣文庫本・島原松平文庫本・扶桑拾葉集本・群書類従本等が知られているが、今回は群書類従本を底本とした。左に掲げる次田氏の研究によっても、必ずしも悪くない本文と考えられるからである。但し、誤写の疑いなどで文意不明確な箇所は適宜他の伝本によって改め、その旨を頭注に断った。この場合、次田氏の論放から多大の便宜を得たことを特記しておきたい。

〔参考文献〕

比留間喬介『十六夜日記』（新註国文学叢書、講談社、昭二六・五）

築額 一雄『校註阿仏尼全集』（風間書房、昭三三・一〇）

福田 秀一『阿仏尼』（久松潜一・吉田精一編『日本女流文学史上巻』所収、同文書院、昭四四・三）

阿 仏尼論として福田著『中世和歌史の研究』所収、角川書店、昭四七・三）

次田 香澄『うたたね』考―付 東山御文庫本 翻刻』（二松学舎大学論集）昭和四十七年度、昭四八・三）